

2. 事業の概要と成果	
(1) 上位目標	対象集合村の住民が生活向上の基礎となる知識・能力を獲得し、生活の質が改善する。
(2) 事業内容	<p>本事業は、対象地域3州において、地域学習センター（CLC）を設立し、教育関係行政機関及び地域住民と協力の下、センターの運営の自立化を支援するための研修及び教材作成等を支援するものである。そしてセンターという空間に地域住民が集い、知識や技術を学び、様々な機関や団体との結びつきの中で、自己および地域の開発につなげていく。</p> <p>上位目標に設定している対象住民の「生活の質の改善」は、教育機会に加え、安全な飲み水へのアクセス、病気への耐性、安定した収入源など、生活向上に関連するとみられる複数項目を総合的に捉えて定義している。</p> <p>また、本事業では、カンボジア教育省がセンター普及政策において課題を抱えている図書館、識字・識字後プログラムを機能的に運営し、持続発展的なCLCモデルを構築する。本事業が同国におけるCLCのモデル事業として認知され、国内で波及されることを目指す。</p> <p>なお、本事業は全体で5カ年の計画であり、そのうちの最初の3年を日本 NGO 連携無償資金協力申請事業とする。残りの2年は自己資金による継続活動・フォローアップを行う予定である。2年次の具体的な活動は以下の通りである。</p> <p><u>1) 地域学習センター（CLC）設立及び運営指導</u></p> <p>CLC3～5館目の建設及び運営指導が計画通り進捗している。3館目は、住民代表計11名（運営委員会メンバー8名、センター職員3名）の1年目運営強化が完了し、5月から開館した。4、5館目では建設と平行して、住民代表の基礎的能力強化が進行中である。住民代表数は、4館目コークバランでは計11名（運営委員会メンバー8名、センター職員3名）、5館目オープラサットでは計13名（運営委員会メンバー8名、センター職員5名）となっている。事業開始から2年目に入っている1、2館目においては、住民による自立運営に向け、日常の業務について実地訓練を実施している。6月からCLC#1～3で識字教室が開始されてからは、3館では図書館も夜間運営を開始し、その間、識字学習者が図書館員や成人利用者に子どもを預け、授業に専念できるよう計らっている。</p> <p><u>2) 識字教室を通じた基礎スキル（読み書き・計算）の提供</u></p> <p>教育省の予算支払いの遅れのため、教育省運営による識字教室の開催が大幅に遅れたが、6月よりCLC#1～3で識字教室が開始された。3月には、教師の教室運営能力を強化するため、当国で識字事業に長年の実績を持つカンボジアに学校を贈る会（ASAC）の識字教師トレーナーにより、CLC#1～5の識字教員5名を対象に、成人に対する識字教授法の研修会を実施した。現在、1館目ニーペックで</p>

は25名(全員女性)、2館目ロンコーでは25名(女性24名、男性1名)、3館目サンコーでは19名(女性15名、男性4名)の成人が読み書き計算を学んでいる。また、昨年につき、成人向け識字教材の2作品目(環境教育の絵本)を専門家指導の下、制作中である。

3) 識字後プログラムの改善、構築・拡充

昨年から開館している1館目ニーペックと2館目ロンコーで、住民による生活向上研修の月例開催をフォローアップした。生活向上のためには、本からの知識だけでなく、「Learning by doing」(体験による学習)が必須との考えの下、これまで専門家の研修を受けた地域住民が講師を務め、野菜栽培、養鶏、母子保健、改良かまど制作についての研修会が開催された。

これとは別に、6月には国内の農業事業で成功を収めているローカルNGO、CEDACとの協力により、稲作研修を実施した。CLC#1~3の農家8名ずつ、合計24名を稲作の農業普及員として育成した。今後、この農業普及員が地域の人的資源としてそれぞれのCLC生活向上研修会の講師を担当し、学んだ稲作の知識・経験を他の住民に伝え、対象集合村全体に普及させていく。

その他にも、生活向上研修の新しいトピックとして制作中の「美容」のプログラムを試験的にCLCで実施した。CLCの持続運営のためには、将来的に住民からの資金調達も不可欠になってくるが、農業や保健衛生などの「勉強っぽい」プログラムだけでなく、家計を守る女性の興味・関心にあわせた、「敷居の低く、親しみやすい」プログラムの充実も必要との考えからである。

4) 対象集合村にて地域学習センター(CLC)に対する認知度の向上

1館目ニーペックと2館目ロンコーにおいて、CLCや寺院など村内の公共施設でのイベント開催時に、運営委員会・センター職員が中心となってセンターの推進活動を行った。センターに成人住民を呼び込むための戦略として、まず住民の教育に対するステレオタイプを打破するため、CLCで住民が好むスポーツや文化活動などを日頃から行えるようにしている。これにより、まず施設に足を運び、CLCに親しんでもらうことを狙っている。推進ポスターについては2作品を制作中である。

5) 関係局・団体・組織間のネットワーク構築

教育省開催のノンフォーマル教育作業部会、教育省の政策に大きな影響力を持つ教育NGOのネットワークであるNGO Education Partnership (NEP)の定例会議など、ノンフォーマル教育についての会議に参加し、本事業からの経験や成果を随時共有した。現在は、関係構築の域を越え、本事業のCLCモデルの浸透を図る政策提言活動がメインとなっている。

(3) 達成された効果	1) <u>CLC委員会・職員・行政担当官を対象に、コミュニティによる運営自立化のための能力強化がされる</u>
	【指標】(ア) 委員会が独自に運営費用を調達できるようになる (教育省負担分の「センター所長給与」と「識字教室運営費」(識字教師給与と生徒の文具費)を除く) 1年目: 30%、2年目: 60%
	【現状】達成見込み 年間運営費用およそ\$1,000のうち、\$600(\$50×12ヶ月)は図書館員への給与であるが、1館目ニーペック、2館目ロンコーともに、この給与の集合村予算への組み込みが完了し、4月からは集合村行政から給与が支払われている。次半期からはCLC委員会・職員が住民からの資金調達を計画しているため、2年目指標は達成が見込まれる。3館目サンコーは建設の土台となる土盛に、すでに年間運営費の3倍ほどにあたる\$2,750を拠出した。
	【指標】(イ) 委員会が独自に地域からニーズを拾い活動に反映できるようになる 1年目: 当会職員同伴で、月例会議を定期的実施している 2年目: 指導付で実施している
	【現状】達成 1館目ニーペック、2館目ロンコーについては、当会職員の指導により、地域からニーズを拾い活動に反映している。3館目サンコーは今のところ月例会議を開催している。
	【指標】(ウ) センター業務・活動が計画の8割以上実施できるようになる 1年目: 計画時から当会職員の指導付で8割以上実施している 2年目: 計画は当会職員と作成するが、活動は指導なしで8割以上実施している
【現状】一部達成 1館目ニーペック、2館目ロンコー、3館目サンコーの3館ともセンター運営日に関しては、祝日を除く週5、6日開館し、計画通りの100%を達成している。生活向上研修会の月例開催についても、センター開館翌月から1月を除き毎月開催し、3館の平均で開催率88%に達している。しかしながら、CLC推進を目的としたイベントの隔月開催については延期され、5月からの開催となった。	

	<p>2) <u>識字教室を通して、対象集合村の貧困世帯が基礎スキル（読み書き・計算）を習得する</u></p> <p>【指標】(ア) 教育省の識字能力試験に受講者の8割が合格できている。 1年目：6割、2年目：7割</p> <p>【現状】不明 教育省の都合により、当初3月～10月の8ヶ月間で予定していた識字教室の開催が3ヶ月遅延し、6月～12月の開催となった。識字教室が12月に終了し試験の結果が出るまでは達成するかは不明。</p> <p>【指標】(イ) 受講者の8割がコースを完了する。2年目：7割</p> <p>【現状】不明 同上。</p> <p>3) <u>対象集合村の貧困世帯が生活改善ための知識を習得する</u></p> <p>【指標】(ア) 講義参加者の8割が、習得した知識・技術を事業が定めるレベルで生活改善に活用している（インタビュー形式で図る） 1年目：6割、2年目：7割</p> <p>【現状】達成 1館目ニーペック、2館目ロンコーでは生活向上研修会を毎月開催しているが、その度参加者から活用しているかのデータは取っていない。しかしながら、昨年11月からニーペックとロンコーより合計44名を招いて、野菜栽培、養鶏の農業普及員を育成するための研修会を行ったが、このうち70%が習得した知識・技術をすでに生活改善に活用していると回答している。</p> <p>4) <u>対象集合村にて地域学習センター（CLC）に対する認知度が向上する</u></p> <p>【指標】(ア) 対象集合村の住民の5割がセンターの役割及び活動を認知している 1年目：3割、2年目：4割</p> <p>【現状】達成見込み 現時点で未測定だが、1館目ニーペック、2館目ロンコーとも今半期からCLCや村の公共施設でイベント時などに広報活動を本格的に始めたため、次半期測定の際には2年目指標の達成が見込まれる。3館目サンコーは次半期から広報活動を本格化させる。</p>
--	---

5) 中央・州レベルにおいて、ノンフォーマル教育及びCLCのネットワークが強化される

【指標】(ア) 州レベルにおけるノンフォーマル教育作業部会発足の必要性が、中央レベルで認識される

2年目：当会職員が州レベル部会の必要性について中央部会で発表する

【現状】達成

当会職員が州レベル部会の必要性について中央部会で政策提言を行った。1年次申請書(3)事業内容に記載したとおり、成果5の最終目標は、「(本事業が目指す)CLCモデルケースの浸透を図っていく」ことである。この意味において、成果5は当初の予定を大きく上回るかたちで達成している。今半期からすでに、教育省ノンフォーマル教育局、教育NGOネットワーク間で、本事業のCLCをモデルとみなす動きが加速している。

昨年まで教育省のCLC政策では、建物は既存のものを使用し、運営スタッフは全員ボランティアで、教育省から年間の運営費は支出されなかった。これに対し、昨年、CLC有識者のみで構成・発足された教育省主催のCLC作業部会に加入後、この点において当会が政策提言をしてきたことが実り、今年から教育省はCLCへの新しい建物と、運営スタッフへのインセンティブ、ならびに年間の運営費の予算をつけることとなった。

今年3月に発行された教育省ノンフォーマル教育局2014年度年次報告書(21ページ)では、本事業のCLCが成功例として紹介された。また、6月には教育省政策に大きな影響力を持つNEP主催で、教育省ノンフォーマル教育局、ノンフォーマル教育の主要国際・ローカルNGO約30団体が参加してCLCの研修会が開催され、その主目的は本CLC事業のノウハウを学び、当国の今後のCLC政策を考えるというものであった。当会はキースピーカーとしてプレゼンし、研修のフィールド訪問先として、1館目ニーベックCLCを案内した。

本研修会に教育省ノンフォーマル教育局代表として参加していた副局長は、「(本事業の)図書館、識字教室などの生涯教育への取り組みや、ノンフォーマル教育における教育へのカジュアルなアプローチをCLC政策に加えていくことを検討する」と明言した。この訪問にはTVクルーも同行し、ニーベックCLCが成功例として主要局で放送された。この他にもNEPのCLC研修会でホストをつとめたことがきっかけとなり、ニュース番組のインタビューコーナーに出演し、当事業を全国放送で宣伝した。

6月には教育省、国連機関、NGO約60団体が参加して、青年を対象とした貧困削減についての会議も開かれ、当団体はこちらでもキースピーカーとして招待され、本事業の事例を共有し、「貧困削減に貢献するCLC」としてこちらも全国放送で取り上げられた。この他、他団体から講師として本事業のノウハウ共有の正式依頼を

受けている。

上記の成果に加え、対象地域で次のような正のインパクトもみられた。

社会開発活動の活発化

CLCという自由な教育の「場」を生み出したことがきっかけとなり、CLCを媒体とした様々な活動が活発化している。

地域住民の要望で、今年からコミュニティ幼稚園がニーペックCLCで開催されている。週5日、午前7時から9時、20名の子どもたちが学んでいる。不定期ではあるが、同様に、中学生が自発的に文字の読み書きの授業を子どもと大人を対象に開催している。

ロンコーCLCでは、他団体のWorld Visionが、計31日間、述べ150名の住民を対象に、母子保健、栄養、貯蓄グループ、野菜栽培、伝統舞踊、英語教室など多岐にわたる研修をCLCで実施し、現在も進行中である。NEPのCLC研修会の開催時、World Visionから協同事業の正式依頼があり、今後、ニーペックやサンコーのCLCも対象地域に設定し、同様の研修会を実施する予定である。

この他、ニーペックでは国連世界食糧計画が30世帯にFood-for-workとして、村の道路の修理の対価として米を配布し、ローカルNGOが30世帯に母子保健の研修を実施、448世帯に蚊帳を配布した。サンコーでは、ローカルNGOが子ども70名を対象に栄養教育を実施した。

今後は支援の受け入れ調整を、当会から各CLC委員会に移しCLCを媒体とした他団体や行政との連携をいっそう促進させていく。

ノンフォーマル・フォーマル教育間の相乗効果

CLCで子どもから大人まで学び、互いの教育にプラスのインパクトを与えている。

まず、CLCが地域の子どもの教育機会の向上においても貢献し、そのことが成人教育にも好影響を与えている。本事業のCLCには子どもの利用者が多いが、これは、すべてのCLCの館長が、近隣の小・中学校の校長もしくは副校長を兼任しており、生徒にCLCでの学習を推進しているためである。言い換えると、CLC館長がフォーマル教育の生徒をノンフォーマル教育の施設につなげる橋渡しの役割を果たしている。子どもたちの多くは、絵本だけでなく、農業や保健についての本を読み、学んだことを両親や兄弟に共有している。すでに知識と経験のある成人にとって、外部の第三者からの影響で生活スタイルを変えろということは難しくもあるが、子どもたちが新しいことを率先して取り入れていくことで、成人教育の刺激となっている。また、言うまでもなく、これらの子どもは5年～10年もすれば村を担っていく成人となるという意味で、早くも次世代の育成が軌道に乗っている。

とりわけ、ニーペックCLCでは、文字の読めない成人のために子

	<p>どもが読書を手伝う光景が日常的に見かけられる。この行いは当国のCLCの成功例として、教育省ノンフォーマル教育局2014年度年次報告書に取り上げられるに至った。</p> <p>一方、生活向上や識字教室研修で学んでいる成人に対しての聞き取り調査から、これらの教育機会を通して学び、実践し、実際に少しずつでも生活向上につなげ、教育の力を自ら体験した成人学習者は、今度は自身の子どもの教育に対してもより深い理解を示し、後押ししようとする傾向がみられる。</p> <p>今後も子どもから大人、大人から子どもへの教育の相乗効果がいつそう進んでいくことが期待される。</p>
<p>(4) 今後の見通し</p>	<p><u>1) 地域学習センター（CLC）設立及び運営指導</u></p> <p>開館中の3館については、センターの日々の活動の定期モニタリングを通して、センター職員・委員会を対象に、自立運営化を目指し、広報、資金調達などの実地訓練を続ける。これらの3館では夜間に識字教室が始まったこと、並びに、そもそも成人利用者は日中、仕事や家事で忙しく、夜間しか自由に使える時間がないこともあり、CLC施設の夜間運営体制を強化していく。さらに、CLCの持続発展性を高めるため、センターの一部娯楽サービスの段階的有料化による運営費確保の可能性について、住民と検討していく。建設中の2館については、センター職員・委員会の基礎的能力強化を継続し、センターの開館に備える。</p> <p><u>2) 識字教室を通じた基礎スキル（読み書き・計算）の提供</u></p> <p>開館中の3館で識字教室運営のフォローアップ活動を続ける。この経験から、本事業の識字教室運営マニュアルを作成していく。成人向け識字教材の2作品目の制作を完了させる。</p> <p><u>3) 識字後プログラムの改善、構築・拡充</u></p> <p>開館中の3館で、生活向上研修の月例開催のフォローアップ活動を継続していく。このフォローアップにおいては、センター職員・委員会が段階的に当会職員の支援がなくとも研修を実施していけるよう計らっていく。生活向上研修の新たなコンテンツ開発も続ける。</p> <p><u>4) 対象集合村にて地域学習センター（CLC）に対する認知度の向上</u></p> <p>開館中の3館で、CLCや寺院など村内の公共施設でのイベント開催時に、運営委員会・センター職員が中心となってセンターの推進活動を継続する。推進ポスターについては2作品の制作を完了させる。</p> <p>成人住民のCLCへの呼び込みには、二段階に分けた「2段戦略」を取っていく。対象地の成人住民の多くは、教育に対して過去の経験から苦手意識とステレオタイプを持っており、一般的に、教育レベルの高い住民を除き、センターの敷地に足を踏み入れることでさえ、かなりハードルの高いことなのである。対象地域の成人は、小学校未</p>

修了者、および読み書き計算に不安がある住民がともに8割を超え(昨年度ベースライン調査結果より)、教育に対して「堅苦しい、つまらない、自分は対象外」という意識を持っている。このような住民を呼び込むには、まず住民の教育に対してのステレオタイプを打破する必要がある。そのため、第一段階として、CLCで住民が好むスポーツや文化活動などを行えるようにし、まずCLC施設に足を運び、親しんでもらう。その後、第二段階で、上記の親しみやすい活動と、センターの識字教室などの教育活動をつなげ、段階的に利用者を教育活動に引き込んでいくことを狙う。

5) 関係局・団体・組織間のネットワーク構築

ノンフォーマル教育における重要な会議への参加を継続し、事業の経験や成果の共有を通して、本事業のCLCモデルの浸透を図る。